

自著紹介

『周縁地域の自己認識—津軽とオタゴの知識人を中心に—』

(郭南燕 編著)

郭 南 燕*

本書の出発点は、ニュージーランド、日本、米国に在住する研究者十二人が津軽地方とニュージーランド・オタゴ州との相似性に着眼したことである。すなわち、東北地方を「日本のスコットランド」と見立て、スコットランドのように先進地域になりたいという向上心があり、オタゴでは南半球のスコットランドを作ろうという熱意に燃えたことがある。このような進取心を持ち得たのは、〈辺境〉に身を置いたからではないかと思われている。そのため、十二人の研究者は歴史、言語、文学、産業、音楽、環境という角度から周縁地域の人々の自己認識がどのように地域文化の形成を促進したかをめぐり、研究を行ない始めたのである。

本論文集は三部からなる。「第一部：近代津軽の文化人と自己認識」は津軽の文化人の自己認識と文学表現を検討する。「第二部：オタゴの周縁性と文学者」は、ニュージーランドの作家の文学化したオタゴのイメージを論じる。「第三部：周縁地域に生きる人々と自然・産業・文化」は、津軽のリンゴ産業、観光業、ヒバ林業と、オタゴの金鉱業、観光業、林業との展開を辿り、周縁地域で維持されている独自性を分析する。

具体的には、「第一章 辺境意識とアイヌ史—津軽言説のなかの歴史認識—」(河西英通)は、東北北端の津軽地方と下北半島の人びとが1920年代から30年代にかけて、アイヌ民族と見られ、その地方が日本中の異境と思われたことを取り上げ、福土幸次郎や柳田国男の提唱した地方主義がアイヌ史を視野に収めず、辺境意識が欠落したため、結局「日本中央部」への連続意識が強く働いていると指摘すると同時に、北東北はマジョリティでもなく、マイノリティでもない、独自の歴史と空間を持つ存在だと見ている。「第二章 津軽作家の周縁意識—言語学的視点からの一考察—」(山口征孝)は、方言による地方風土の表現が、中央の既定価値の単一さを露呈させるが、標準語に対して津軽弁を位置づける時の差別構造と、日本を中心にして周辺国家を語る時の差別構造との相似を分析し、周縁意識の複雑性を呈示する。

「第三章 北畠八穂の描いた津軽—他者と出会う場所—」(ハンナ・ジョイ・サワダ)は、北畠の文学におけるよそ者と被差別者(混血児など)の生活環境と津軽方言を中心に、津軽が多くの他者を包含し、多様性に満ちている場所だと論じる。「第四章 津軽作家の自嘲表現—葛西、石坂、太宰、長部を中心に—」(郭南燕)は、代表的作家の作品中の作者らしい登場人物の自嘲表現に現われた自己相対化と自信と余裕を分析し、作家たちのもつ自己卑下の克服法を指摘する。

「第五章 南島の周縁性とジャネット・フレイムの文学—自叙伝と『包囲の状態』を中心に—」(ラクエル・ヒル)は、フレイム文学を通して、ニュージーランド人のアイデンティティ、南島人のジレンマ、南島の風



* オタゴ大学

Associate Professor, Department of Languages and Cultures, University of Otago, New Zealand

景、ダニーディンの独自性を検討し、自然の風景が人間の精神によって構成されていることを立証する。「第六章 ジェイムズ・K・バクスターとダニーディン—死と再生の二年間—」(中尾まさみ)は、自らの存在の根幹に関わる地オタゴに帰還した詩人が、二年間の同地滞在中に集中して死について瞑想した作品を生み出したことに注目し、地域と文学の相関のあり方を照射する。そして、「第七章 始まりの場所としてのダニーデン—ルース・ダラスと距離の問題—」(澤田真一)は、ダニーディンを住処とする詩人ダラスの文学における自然と人間との調和的關係に焦点を当て、周縁と中心との流動性、東洋の禅思想から受けた影響を明らかにする。

「第八章 『リング伝説』を考える—文明開化期津軽のウエスタンインパクト—」(北原かな子)は、津軽地方の基幹産業であるリングの濫觴期についての言説を取り上げ、明治初期津軽に滞在したキリスト教宣教師が開祖であるとの「伝説」が生み出された背景にあった近代津軽地方の独特な文化受容形態を考証する。「第九章 オタゴの華僑・華人たち—周縁化された人々の悪戦苦闘—」(エドワード・テナント)は、オタゴの金鉱採掘史に残った華僑・華人が差別を受け、さらに周縁化されていたにもかかわらず、地域の周縁性を巧みに利用し、経済的成功をおさめたことを論じる。

「第十章 周縁地域の音楽—ダニーディンと津軽地方—」(ヘンリー・ジョンソン)は、ダニーディン市と津軽で大きな役割を果たしている地方音楽に注目し、地域独自性の表現に果たす音楽の役割、周縁地域の観光業が地方音楽の維持に与えた利点を説明する。「第十一章 原生林保護—青森とオタゴとの周縁性—」(郭南燕、ポール・スター、ジェームス・ビティ)は、森林と住民の関係における青森とオタゴとの共通性、原生林保護と林業における異同を述べ、周縁地域の人々と土地との関係が森林愛護によって現われていることを論証する。

本書の主題は周縁地域の多様性と独自性に照明を与えることであり、十一の論文に共通するいくつかのテーマがある。まず、津軽方言は、津軽人の文化を代表する一部分であるが、津軽弁をしゃべることによって、卑下・自慢の二重心理がある(一、二、三、四章)。津軽出身の作家は、自嘲という屈折した表現を通して、卑下を乗り越える可能性を示し、周縁に生きる人々の複雑な心理状態を表している(四章)。また、津軽弁を文章中に使用することは、標準語を相対化し、言語表現を多様化させ、中央の既定価値を揺るがす効果をもっている。

しかし、方言を話すことによって中央の人々から差別を受けた人は、外国人を差別してしまう傾向を見せている。たとえば、津軽弁と津軽人が「エチオピア語にたがはれ朝鮮人に間違はれ」たこと、「台湾生蕃の如き土族でなかつた」と強調したこと(一章)、筑紫には「昔から囚人とか食いつめ者、あるいは徴用で朝鮮の人」がいたこと(二章)、津軽弁を話して「支那人」と思われて憤慨したこと(四章)などの例があった。そのような差別意識を超越した北畠八穂は、民族出自不明の子供、日本人と黒人の混血児などを、津軽という舞台に登場させ、津軽地方を多人種に開放する場所に作りあげている(三章)。多様性と柔軟性と独創性をもつ北畠文学は今日再読する価値があろう。

周縁に生きる人々がもつ共通性はオタゴと津軽に見られる。オタゴ州は、世界の果てニュージーランドのさらなる片隅にある。にもかかわらず、人口の大半がヨーロッパからの移民であり、この辺境で南半球のスコットランド(地上の楽園)を作る自信を持っていた。同じように、私学の伝統を持つ津軽の東奥義塾は、西洋からの教師を雇い、中央を飛び越えて西洋と直接接触することによって、教育の独自性を保とうとした(八章)。このような発想は、辺境にいるからこそできたものだろう。

自然風景と人間文化は不可分である。オタゴの風景が人間精神の原風景となっていることは、本書で取り上げられたニュージーランドの作家三人に共通している。彼らにとっては、オタゴは地理的周縁ではあるが、創作の中核の一部となり、内部と外部を結び、死と生を関係づけ、ニュージーランドを中心とつなぐものである。そのため、彼らの文学は周縁地域の〈多様性〉と〈独自性〉と〈流動性〉をよく示している(五、六、七章)。

オタゴの〈多様性〉は、マオリ、スコットランド人、華僑・華人を中心とする人々がともにオタゴの歴史を形作っているところにある（第九、十章）。そして、オタゴの自然の〈独自性〉を支えているのは、独特な風景である原始林の保護を始めたスコットランド人の努力であった。同様に、青森ヒバ林も住民の愛でる対象だけではなく、保護され、利用され、青森地域と青森人の文化の一部とされている（十一章）。周縁地域の産業が地方に留まらず、全国に影響を及ぼしていることは津軽とオタゴの例からも見られている（八、九、十、十一章）。

本書の十二人の研究者が地理的距離を超えて津軽とオタゴとの比較研究に取り組むことは、これから世界に開放していく大学教育と研究の方向性を示す良き試みと言えよう。十二名の研究者はそれぞれ、弘前大学（サワダ、沢田）、上越教育大学（河西）、秋田看護福祉大学（北原）、東京大学（中尾）、神奈川大学（ヒル）、フロリダ大学（テナント）、オタゴ大学（郭、ジョンソン、スター、ビティ、山口征孝）に所属している。これらの研究者の大半は2003年から2004年にかけて、相互訪問と資料収集を行った。

本書は弘前大学とオタゴ大学の学術交流の成果でもある。両大学は2000年に交流関係締結以降に学術交流を頻繁に行い、北原かな子、郭南燕編『津軽の歴史と文化を知る』（岩田書院、2004年）とNanyan Guo, Seiichi Hasegawa, Henry Johnson, Hidemichi Kawanishi, Kanako Kitahara, Anthony Rausch 共著 *Tsugaru: Regional Identity on Japan's Northern Periphery*（University of Otago Press、2005年）をすでに上梓している。

南半球と北半球の極めてかけ離れているオタゴ州と津軽地方の文化を、内部と外部から複眼的な視線を通して論述することが本書の特徴である。このような新鮮な試みは、新しい知見の発見につながるだろうと思う。

〔弘前大学出版会 本体1,400円〕